

Date [ヘブル人への手紙の学び] (4)

「失われた人間性を回復された方」(ヘブル 2:5-9)

「神は万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした。それなのに今なお私たちはすべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。ただ、御使いはよりむしろわすかの間、低くされた方、すなわちイエスのことは見ています。イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」

今日学ぶ箇所は、実に驚くべき事が告げられている。5節の「というも、神は、私たちが語っている来たるべき世を」とあります。この来たるべき世とは、2節の「この終りの時には」と同じ意味で、旧約の世界から見ると、新約の「福音の時代」とも言い換えることができます。4-6節には、「人の子とはいったい何ものなんでしょう。あなたがこれを顧みてくださるとは、あなたは人を御使いはよりむしろわすかの間、低いものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせ、万物を彼の足の下に置きました。」とあります。「わすかの間」は、また「わすかに」とも訳されると、下の注にあります。この詩の作者タビテが「人の子」と言うとき、それは人間のことを指しています。17や人の慣習的な表現方法に「平行法」と言って、同じ意味のことは別の言い方で繰り返す方法がありました。それからすると「人の子」とは「人間」と同義語であると分ります。しかし、福音書を読むと、主イエスさまが、ご自分のことを「人の子」と表現されています。その根拠は、ダニエル書 7:13 「人の子のような方」と同一視されています。このダニエル書の箇所を引用すると次のようになります。「見よ、七の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は「年を経た方(神)」のもとに道み、その前に導かれた。この方に主権と栄誉と国が与えられた。……その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない」(ダニエル 7:13-14)。この「人の子」は来るべきメシア(救い主)であると解釈されています。しかし、このお篇の作者タビテは、4-10節で、明らかに創世記の冒頭の天地創造が詩にされていて、その創造の華と言える人間の創造を「神(エロヒム)にわすかにあるものとして人をつくり」(ヘブル語の「エロヒム」は複数形で「天使」とも訳せる語である)。神のかたち³に人を造り、他の被造物よりも大きな尊厳を与えられました。そして「あなたの御手のわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置きました。」とあります。神は最初の人アダムに神が造られたものに名前をつけさせた、とあることは、自然界を統治する役目を与えられたと解釈できます。しかし、彼アダムは罪を犯して、その職務を果せなくなり、失敗し挫折しました。その子孫である私たちは、みなその罪の結果を負っているため、この神により託された使命を果すことができていないです。現今の地球環境問題や、最近の世界状況が如実にそれを物語っています。「神は万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものは何も残されませんでした。それなのに今なお私たちはすべてのものが人の下に置かれている(コントロールされている)のを見てはいません」この句はこの事を意味しています。しかし、この状態は、最後の(第二の)アダムであるイエス・キリストが来られたことにより変えられたのです。「イエスは、その苦悩と死とを通って栄光を受けられた。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」とこのヘブル書の記者は語っています。

ヘブル書には、パウロの手紙にあるように「十字架と復活」が鍵³になって出て来ません。

「栄光と誉れの冠を受けられました」とありますが、この栄光と誉れの中に、主の復活が含まれていると理解できます。パウロは、コリント2:6-11の箇所、「十字架の死まで従われました。」に続いて「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました」とある通りで、この聖句の中にも復活の語は出て来ませんが、「高く上げ、すべての名にまさる名を与え」に復活と昇天がこめられていると思われます。十字架と復活は、キリスト者にとって不可分のものです。この最後のアダムであるイエスキリストがこの世で成し遂げられたみ業の時間、「わすかな間」でありました。しかし、この事が人間(最初のアダム)が犯した罪、そしてその失敗と挫折と、サタンへの屈従と罪の束縛、虚しい無気力な状態から「人の子ら」(人間)を解放して、本来神が計画されていた人間による宇宙を含む大自然や世界を統治する力を回復させるためであった。これを三つの基本的事実に要約すると次のようになる。

- (1) 神は人間を自身よりも少し低くつくり、人間(人の子)にこの世界を統治させようとされた。
- (2) 人間は罪をおかし、その結果、栄光と勝利と秩序の代りに敗北と挫折と混乱を経験した。
- (3) この混沌としたみじめな世界に「人の子」(イエスキリスト)が来られた。それは、キリストの生と死と復活の栄光を通して、人間をあるべき姿に回復するためであった。

聖書学者バーフリーは、「今までの事を別のことはで言うならば、ヘブル人への手紙の著者が意図するところは、次の三つであると言う。

- 1). 人間の理想像……神に似かよったもの、宇宙を治めるべきもの。
- 2). 人間の現状……勝利の代りに敗北、栄光の代りに失敗を経験し、王となるべく定められながら、実際は奴隷になっている。
- 3). 現実の理想に向かう道……この変革はキリストによってもたらされる。イエスキリストは苦悩と栄光によって、人間を本来あるべき姿に変える。この変革はキリストなくしては実現しない。

最後に、この詩篇8:7-8についての名尾耕作師の講解を引用させて頂く。「この「人」とは、イエスを指している。そのイエスを神は「わすかな間御使いよりも低いものとし」と言っているのである。この意味は9-10節にあるイエスの苦難、死の苦しみ、死を味わわれたことである。イエスがゲッセマネで「苦しみもたえて、ますます切に祈られた。そしてその汗が血のしたたけのように地に落ちた」(ルカ22:44)とき御使いが天から現れてイエスをかづけた。「死を味わわれた」とは、まじかに神から捨てられてしまったことであった。ルターは、この節を「あなたは彼をばらけの圃、神に捨てられたものとされるが、あなたは彼に栄誉とほまれと冠を与えられる」と翻訳している。ルターは、この「ばらけの圃」をキリストが十字架上で「わが神、わが神どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(詩22:1)と叫ばれた。あの数時間であると説明している。(マタイ27:45-)この事は、ヘブル書の記者が9:28で言っているように、「キリストも多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げられた」とことである。これこそ全聖書のメッセージである。キリストによる贖罪の福音である。+